

# チャイルドライン とちぎ



チャイルドラインとちぎは 18 歳までの子どもがかける子ども専用電話です。現在、全国のチャイルドラインと連携し、毎日 16～21 時までフリーダイヤルでつながります。2018 年からオンライン相談も開設しています。



『黄金の森』  
松江 比佐子

私たちは  
「子どもの権利条約」の理念に基づき  
すべての子どもたちの豊かな「子ども時代」が保証され、  
自分らしく生きていくことができる社会作りを  
目指しています。

## 特集

### ★公開講演会

『共に生きる子どもたちを育むために』副島賢和氏

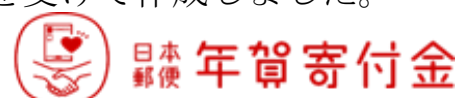
### ★『少年事件の背景にあった虐待と貧困』

～川口市祖父母強殺事件から見たこと～

発行元

認定 NPO 法人チャイルドラインとちぎ広報部  
〒320-0837 宇都宮市弥生 1-6-3  
Tel&Fax 028-614-3253  
E-mail info@cltochigi.org  
<http://cltochigi.org>

この冊子は 2022 年度日本郵便年賀寄付金の助成を受けて作成しました。



## 『共に生きる子どもたちを育むために』

4月10日（日） 於：とちぎ福祉プラザ

赤鼻をつけた「ホスピタル・クラウン（道化師）」と呼ばれる独特のスタイルで、入院中の子どもたちが学ぶ「院内学級」の教師を務める副島賢和先生。さまざまな事情を抱えた子どもたちと接する中で、子どもたちが教えてくれた大切なこと。副島先生のお話は、やさしく、分かりやすく、私たちの心に響いてきました。お話の中で、特に印象に残ったところ、そして私たちチャイルドラインの活動にも相通じる思いを抜粋して紹介します。



## 【副島賢和氏プロフィール】

昭和大学大学院保健医療学研究科  
准教授、学校心理士スーパーバイ  
ザー。ドラマ『赤鼻のセンセイ』  
（日本テレビ）のモチーフとなる。

## 先生の言葉から

「今日は何の日かご存じですか？ 4月10日は『シブリングデー』（きょうだいの日）。病気と闘っている子どもだけでなく、そのきょうだいのことも考えていただけたらいいなと思います」

「今日の話と私の視点は、病気を抱えた、病気による困難を抱えた子どもたちの話です。子どもたちは心と体がとても近い。自分の周りで何かあると体の症状として表れる。病気の子どもたちだけでなく、病気でなくても心や体が傷ついている人たちのことを思い浮かべてください。院内学級の話ですが、それは入院している小学生の話でしょう、と遠くに置くのではなく、それ分かる、と考える時間にして

いただけたらと思っています」

「子どもの当たり前を保証したいと思います。当事者意識を持つために。共に生きる子どもたちをどうやったら育むことができるかなとずっと考えています」

「今、教師として子どもたちに向き合い、当事者意識ってどうやってみつけたらいいのと聞かれたときに答えているのが ①視点を変えて物事を見ること、②想像する力を持つこと、③感情、気持ちを大切にすること。この三つです」

「マイクロアグレッションという言葉があります。無意識の差別、偏見といわれている言葉です。自分の中に気が付いていない差別意識や偏見があるのではないか。それをきちんと意識することが必要だと考えています」

「どんな感情も大切にしているからねと言います。そして、あなたはひとりじゃないよということ、子どもたちに伝えたいと考えています」

「感情に良い悪いはありません。どんな感情も持っていていいんです。悲しいという感情は人にやさしくするエネルギーになります。悔しさ、怒りは何かに挑戦するエネルギーに変えていくことができます。だからどんな感情も持っていていいんだよ、と子どもたちに言います。ただそれを人に伝えるときには、自分の気持ちが正しく伝わる伝え方、相手の人がちゃんと受け取ってくれる伝え方があるよねと。それは学んでいってくださいねと伝えています。感情は願いを伝えるという役割を持っています。この子の、この感情の向こうにある願いは何なんだろうと考えながら関わるようにしています」

「子どもの心の声を聴きたいと思います。心の声を聴くということは、子どもの感情を、表情や行動から読み取って、言葉で表現するのを手伝ってあげることです。本当は小さいころにいっぱい泣いていたときに、ああ、悲しいのね、悔しいのねといっぱい言ってもらった子は、同じような感覚が体で湧き上がってきたら、悲しいです、悔しいですと言えるようになります」

「いろいろな感情をもらったときに、受容はするけど許容はしないということを頑張っています。

受容をするというのは、どんな感情も持っていていいんだよと感情を受けとめること。許容をしないというのは、駄目なものは駄目、やらなくてはいけないことはやりますよと、行動を容認しないこと。これを頑張っています」

「学びの場で成長回復のために必要なこのSとCとHの三つは、どんな短い時間でも、子どもたちにできると今も思っています。出会いのSafetyを、関わりでChallengeを、そしてあの子たちと別れるときにはあの子たちにHopeを持ってもらう。頭文字SCHなんです。スクールSchoolの最初の3文字なんです。ただ、これを一人でやるのは無理。チームで関わる必要があると思っています。子どもを真ん中に置いてチームになりましょうと。でも、子どもを真ん中に置いてというのは、何か違うような気がしているんです。

子どももチームの一員に入れて、では真ん中に何を置くの。それはメンバーが抱えている困難な課題です。そんなチームを作れたらなと思っています」



～参加者の感想から～ (たくさんの感想が寄せられました。一部を紹介します)

- ◆先生のお話を初めてうかがいましたが、院内学級だけでなく色々なことに通じるお話だと思いました。「感情の向こうにある願いを探る」「子どもも一員のチームをつくる」私の中でとても印象に残り、改めて気づけたことでした。
- ◆大学の授業で副島さんの話を聞いたことがあり、興味があって講演に申し込みました。“自分を守ることができない人が人を支えることは難しい”という言葉が印象的でした。本当にありがとうございました。
- ◆副島先生、すてきなお話ありがとうございました。何度聞いても心に刺さります。“ひとりじゃないよ” “どんな感情も大切に”この言葉大事にしたいと思います。

～講演をふりかえって～

チャイルドラインでも日々子どもたちと電話やオンラインチャットで話をするときに、「どんな感情も持っていていいし、そんな自分もOK」「あなたは一人じゃない」ということを伝えていきます。それが大事だということをあらためて思いました。

「こういう話をお聞きになるときに、ちゃんとご自分を守りながら聞いてくださいね」と参加者への気遣いもありました。私たち自身も自分を駄目だと思ったり、こんなではいけないと思ったり、自分が傷ついていくこともたくさんある。そんなときのワーク「1分間旅行」を教えていただきました。どこに行っても、何をしてもいい、想像の世界へ。これもなかなか素敵な時間でした。

# 『少年事件の背景にあった虐待と貧困』

## ～川口市祖父母強殺事件から見たこと～

2022年2月、チャイルドライン北関東信越エリアによるオンライン研修が行われ、元毎日新聞記者の山寺香さんにお話を伺いました。さいたま支局で事件・裁判担当だった山寺さんは、さほど注目されていなかったこの事件の裁判員裁判を傍聴し、闇から闇へ葬られることへの焦りや社会の側の責任を感じ、少年との面会と文通で話を聴きながら取材を続けました。

私たちは、祖父母殺害という痛ましい事件に、さらに複雑な背景があったことを初めて知り、大変な衝撃を受けました。そして、山寺さんの著書『誰もボクを見ていない～なぜ17歳の少年は祖父母を殺したのか～』を読むことにしました。

### ◇事件のあらまし

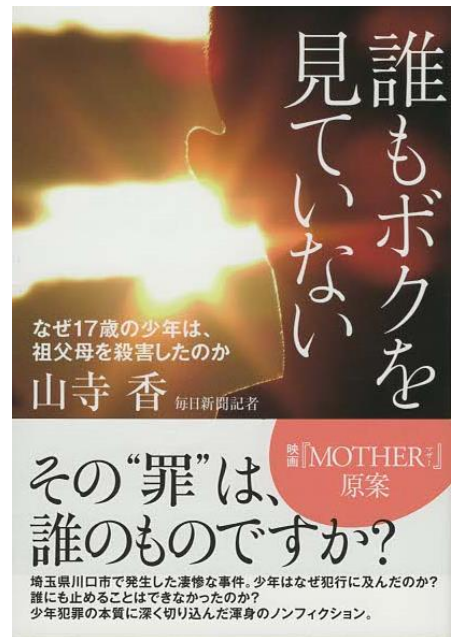
2014年3月29日。埼玉県川口市のアパートで、背中を刃物で刺された70代の老夫婦の遺体が発見された。警察は当時17歳の孫の少年を強盗殺人容疑で逮捕、殺害の動機は、「金目当てだった」との供述が報じられた。少年の母（老夫婦の次女）も強盗容疑で逮捕された。

少年は小学5年から中学2年まで、母親と義父に連れられ、定まった住まいを持たない生活をしてきた。両親から度重なる身体的・精神的虐待、性的虐待、ネグレクト（育児放棄）を受け、親戚への金の無心を繰り返し命じられた。母親は働こうとはせず、少年がやっこのことでお金を得ると、ホテル代やパチンコ代ゲーム代と浪費した。「殺してでも、金を持ってこい」と祖父母殺害を母親が指示し犯行に及んだとされる。

殺害指示を一貫して否定した母親は懲役4年6か月だったのに対し、少年の判決は懲役15年となった。

少年は住民票を移さず転居を繰り返していたため、行政が居場所を把握できない居所不明児童\*だった。当然、義務教育も受けていない。

\*居所不明児童 住民票を残したまま姿を消し、転居先でも住民登録をしないために行政が居所を把握できない子ども。そのために学校で教育を受けられず、医療や福祉、各種の行政サービスに結びつかない。



(ポプラ社 2017年)

※2020年7月公開された「MOTHER」(長澤まさみ主演)は「誰もボクを見ていない」が原案。実際の事件を大筋でなぞっている。一方でフィクションであり、細部で異なる部分も多い。大きな違いの一つは映画の主人公は母親であること。

2年間のモーテル暮らし、横浜市内の公園で野宿、簡易宿泊所、建設会社で住み込み。少年を気にかける大人は何人もいたが、少年の心には届かなかった。幾度か行政機関との接触がありながらも少年を救い出すことができなかった。中学2年の頃、一時生活保護を受給したときがあり、生後半年の妹と一時保護を説得したが、親の強い反対で実現しなかった。

## ◇少年の心理状態

法廷で明らかになった少年の生き立ちは、実母や義父による虐待や精神的コントロールなど、常軌を逸したものでした。

小学5年の時、少年は母親に1か月間置き去りにされます。この時の見捨てられた感や恐怖によるトラウマが後に母親に対する強い依存を招き、これらは17歳になるまで続いたとされています。また母親も少年に強く依存し共依存の関係にありました。

義父が姿を消した後は、母親から「お金がなくて生活が苦しいのはお前のせい。お前がなんとかしろ」と責め立てられ、自分が本当に悪いと錯覚していき、精神状態も限界を超え犯行に及んでしまいました。

不安定で過酷な生活でしたが、少年はモーテル暮らしのなかで生まれた13歳年下の妹を大切に世話をしていた一面も持っていました。裁判の中で、妹のために仕事を頑張るといのが唯一の心の支えであり、妹には家族は温かいものと思わせたかったと証言しました。



お金のある時はホテルに泊まり、お金がなくなると公園で野宿していた。夜通し家族で公園をさまよいながら、少年は何を思っていたのだろうか…（写真はイメージです）

◆本書には、「服役中の母親にも取材を試みたが信憑性のある回答は得られなかった」との一文があり、裁判以外の母親が登場することはありません。しかし、読み進めるほどに強くなるのは、母親への関心でした。

彼女にこそ何らかの専門的な支援が必要だったのではないかと憶測の域を出ませんが、親自身にまでさかのぼったケアが虐待対策のキーになることは、少なくとも言えるのではないのでしょうか。

## ◇私たちができること・チャイルドラインとしてできること

少年はある人に「なんの為に生きているのかが分からない」と言ったそうです。彼の苦しみの深さがうかがえます。明確な答えは得られず、人に頼るのは間違いだったと落胆したと本にありました。

自分に問われたら何と返せたでしょうか。やはり期待に沿う答えはできなかったかもしれません。私たちは彼のような子どもに何ができるのか。読後、皆で考えました。

気にかかる子どもがいたら声をかけ、見守り続ける。自分とは無関係と思わず、できることは何かを考え行動に移す。虐待が疑われるなら勇気を持って通報する（虐待の通報は国民の義務）。このことをいま一度認識しようという結論に至りました。

チャイルドラインとしてできることは何でしょうか。

学校生活すらない子どもたちに、チャイルドラインの存在は届かないかもしれません。でも、彼が自殺防止相談ダイヤルを知らせる駅前的大型ビジョンを見上げたように、接触のチャンスがゼロとは限りません。子どもたちの目に触れやすく、身近な存在になれるような広報活動や社会発信は欠かせません。

また、日ごろの電話では、かけてくる子どもたちが私たちの想像を超えた生活をしていることもあると、常に意識しておくことを確認し合いました。彼らの状況を把握するためには、独りよがりの常識を挟まず、受話器の向こうからの声に耳を傾けることが求められます。

◆2017年のさいたま地裁公判以降、報道を見た多くの人や専門家からも力になりたいという声が集まり、任意団体「誰もボクを見ていない支援の会」が誕生。現在でも支援の輪が広がっているそうです。

これほどまでの反響は、少年の人間性によるところもあるように思います。本書に掲載されている彼の手記は、長い間教育を受けていなかったとは思えないほど、人の心に響く言葉であふれています。こうした発信を行うことは、同じような境遇の子へ目を向けてほしいという願いからの行動だと語り、関心は社会へも及びます。

光の見いだせない少年時代でしたが、罪を償った先の未来は必ずしも暗いものではないと信じたい。

個人として、団体として、社会の構成員としてひとつひとつの点を、増やし大きくしていくことで、子どもたちの世界が少しでも生きやすいものにしていくことが大切だと思いました。

私たちひとりひとりが子どもたちを守るという責任を持ち、行動していくこと。

私たち大人の姿勢が問われています。





# トピックス



## 「フェスタ my 宇都宮 2022 に参加」

5月22日（日） 宇都宮城址公園



コロナ禍で開催ができなかった「フェスタ my 宇都宮」が3年ぶりに開催されました。「フェスタ my 宇都宮」は市民の日を記念した大きなイベントです。

「子どもの広場」の出店団体が協力してスタンプラリーを行い、スタンプを集めたら魚釣りゲーム。

開始早々子どもたちがたくさん集まり大盛況でした。



チャイルドラインとちぎでは、子どもくじを出店、アンケートを行い、子どもたちの声を聴かせてもらいました。

### ●アンケート結果の一部（回答が多かったもの）

- ・今いちばん心配なこと…「コロナのこと」「戦争のこと」「勉強のこと」
- ・家で楽しい時…「ユーチューブ」「ゲーム」「食事」
- ・学校で楽しい時…「休み時間」「給食」「体育」



## 「ウクライナ人道危機救護金募金」



4月に開催された副島賢和氏講演会の会場内に、ウクライナ人道危機救護金の募金箱を設置しました。講演会終了後はチャイルドラインとちぎ事務所内に設置し、30,000円が集まりました。

4月27日、ウクライナ大使館を通じて寄付しました。

ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

## 「オンラインチャット受け手養成講座を開催」

4月23日（土） 5月15日（日）

子どもたちがスマートフォンやタブレットを持つようになって、オンラインチャットの着信数が増えています。

受け手が増えることで一人でも多くの子どもたちとつながれるよう、オンラインチャット受け手養成講座を開催しました。

講義や実際にパソコンを使ったロールプレイなどを行い、電話とのやり取りの違いを体感しました。参加者の皆が真剣に取り組んでいました。

チャットする



チャットをしている日は、カレンダーをみてね！



チャイルドラインとちぎのホームページのこのアイコンから入れます。

# ご支援ありがとうございました

令和4年1月～令和4年6月

## 団体

相沢商会(有)	くろさきこどもクリニック	(株)TKC
(有)いちご広告社	黒田内科・循環器科	パスキン工業(株)
いとうこどもクリニック	コスモス会	福田こどもクリニック
宇都宮市上河内地区民生委員児童委員協議会	さいとうクリニック	宝泉寺
(株)環境公害分析センター	白石環境(株)	(株)渡辺有規建築企画事務所

## 個人

阿久津 清	稲垣 正明	柏崎 和枝	鈴木千鶴子	田巻 秀樹	並木 俊和	村上ちぐさ
浅香 淳子	宇梶 武夫	黒崎 佐代	高橋 昭夫	手塚 寛	人見 智子	村上 結花
飯塚 真玄	梅宮千恵子	黒崎登美子	高松 英男	寺脇 立子	福泉 水玲	森 るみ子
飯塚 有美	浦部 延子	黒政 幸子	竹内 望	富田 睦子	福田 容子	八木澤信子
生田 敦	枝野 滋子	癸生川成美	蓼沼 初枝	中新井紀子	古川 弘	山本 令子
生野 俊美	大島 誠	小林 孝司	田中 徹	中村 絹江	保坂利佳子	若色美佐子
池田 教子	小野 悦子	鈴木 潤子	谷 博之	七澤 清	丸山由美子	渡邊 正芳

(敬称略・五十音順)

## ♪インフォメーション♪ チャイルドラインとちぎが参加します!

8月6日(土) 7日(日)

「第47回 ふるさと宮祭り」

警備ボランティアとして参加します!

11月6日(日)

「ふれあいフェスタ」

とちぎ青少年センター(アミークス)

11月26日(土)

「第13回子ども虐待をなくそう!

県民のつどい」とちぎ青少年センター(アミークス)

12月18日(日) 「サンタ de ラン&クリーン」

子どもの貧困撃退♡チャリティ『サンタ de ラン』とは、①子どもの貧困を知ってもらい、②県内で子どもを支援している団体を応援する寄付を集めることで、子どもの貧困をなくすためのイベントです。チャイルドラインとちぎでは今回から、寄付先(寄付をしていただく)団体として参加します。ぜひ、皆様の温かいご支援をお願い致します。サンタ姿で走るボランティアランナーも募集中!

## チャイルドライン支援のお願い

チャイルドラインとちぎは認定NPO法人です。当法人への寄付に際しては、税法上の優遇措置を受けることができます。フリーダイヤルを継続していくために、ぜひご支援くださいますようお願い申し上げます。

支援会員 個人一口 3,000円 団体一口 10,000円 ※何口でも結構です

郵便振替 口座番号 00120-2-659158 ※任意の寄付金も受け付けています

加入者名 チャイルドラインとちぎ

銀行振込 栃木銀行において本会の趣旨に賛同くださり、本会所定の振込用紙による同行本支店の振込手数料を無料扱いにしてくださいました。お振込みの場合は下記に「振込用紙」をご請求ください。

問合せ先 チャイルドラインとちぎ TEL・FAX 028-614-3253 E-mail info@cltochigi.org